

# 装置誘引型コミュニケーション行為を誘発する空間条件の時代的変遷に関する研究

久 隆浩

## Research on historical changes in space conditions leading to social communication

Takahiro HISA

This study analyzes historical changes in the equipment-raised communication act in outdoor space during the Edo period, Showa 30s, and present day. Therefore, this study clarifies that the entertainment performances on the street were reduced in the Showa 30s as compared to that in the Edo period. This change is considered to have influenced the decline of the entertainment performances, and the spatial meaning of streets was changed from being an open space to having functional priority that was controlled by the public, after the Meiji Era. Further, commercial transactions on the streets were reduced in the present age as compared to that in the Showa 30s. This change can be attributed to the change in consumer behavior and the reduction in street space owing to the increase in the use of automobiles.

Keywords: communication space, open space, public space, street, living activities, modernization

### 1. 研究の背景と目的

コミュニケーションの希薄化は、さまざまな社会問題をもたらしている。たとえば、コミュニケーション能力の低下によって人づきあいが苦手な人々が増加し、些細な人間関係のトラブルが殺人にまでつながる事例も出てきた。また、高齢者の一人暮らしなど、孤独な暮らしを余儀なくされる人々も増えてきた。さらに、相談相手が身近にいないことが原因で、児童虐待などにつながる事例もある。

こうした事態を打開するためには、人々のコミュニケーション能力を再生させ、コミュニケーション行為を活性化させることが求められる。都市計画的観点から捉えれば、道路や公園といった屋外の公共空間がこうしたコミュニケーションを誘発する場である。そこで、本研

究では、都市空間のデザインという観点から、屋外空間のコミュニケーション行為に着目し、江戸時代から現代までの時代的変遷を調査、分析することによって、コミュニケーション行為を誘発するデザインのあり方を考察することを目的とする。

屋外空間におけるコミュニケーション行為に関する既往研究としては、住戸まわりの空間のセミ・プライベート＝セミ・パブリック化を扱った北原らの研究<sup>1)</sup>、計画的戸建て住宅地の道路空間利用について扱った斉藤の研究<sup>2)</sup>、集合住宅団地の屋外空間利用を扱った全らの研究<sup>3)</sup>、長屋住宅地区におけるいわゆる路地の利用を扱った湧田らの研究<sup>4)</sup>、オープンカフェ利用を扱った青柳らの研究<sup>5)</sup>など、オープンスペースの利用行動に関する研究は、都市計画学、建

表1 屋外空間におけるコミュニケーション行為の類型

コミュニケーション行為の種類		行為の事例				
目的・情報共有型						
		八百屋のトラックに集まる	生協のトラックが去ったあと立ち話をする	幼稚園に子どもを迎えにきた保護者	「みち」で遊ぶ子どもたち	「みち」のはしっこで遊ぶ子どもたち
装置誘引型						
		駄菓子屋に集まる子ども	メロンパン屋に集まる	靴屋の店主と店の前で話をする	カキ水屋の前に集まる子どもと近所の大人たち	公園の猫に集まる子ども
遭遇型	待ち受けタイプ					
	出会いタイプ					
		夕涼みする人との出会い	カキ水屋に集まる子どもに声をかける大人	デイサービスから戻る高齢者を持つ人と通りすがりの人との会話	道路の分離帯に座ってゲームする少年たち	公園のパーゴラの下で休憩する子ども
		玄関前(左)／団地の入り口(右)、でばったり出くわした買い物帰りの人とこれから外出する人との出会い	スーパーの前でばったり出くわした人々	みちでばったり出くわした二人	玄関先のみちで出くわした三人	

築学、造園学などの分野において多数存在する。これらの研究は、公園や道路、共同住宅園地などオープンスペースの種類ごと、また、計画戸建て住宅地区、長屋住宅地区、都心商業業務地区などオープンスペースが立地する環境の特性ごとの研究がほとんどである。

こうした研究も参考にしながら、本研究では、まず都市部におけるコミュニケーション行為を総括的に概観し、屋外空間におけるコミュニケーション行為の類型化を行なう。具体的には、東大阪市長瀬地区・八戸ノ里地区の現地調査から、屋外空間で見られるコミュニケーション行為を類型化する。

そして、その中から装置誘引型コミュニケーション行為に着目し、江戸期の図会・浮世絵、昭和30年代の写真集、現在の現地調査で見られたコミュニケーション行為を分析し、時代の変遷について考察を行なう。こうしたオープンスペースとその利用の関係についての歴史の変遷を取り扱った研究もいくつかあるが、そのう

ち博士論文として総合的に考察を行なっているものとして、鳴海の「都市における自由空間の研究」<sup>6)</sup>、土肥の「江戸から東京への都市オープンスペースの変容」<sup>7)</sup>があるが、本論文の考察については、鳴海論文から第2部における日本の自由空間の成立と変化、土肥論文から江戸から東京への社会的諸制度の変化と都市オープンスペースの形態的变化を参考にしつつ論を展開する。

## 2. 観察調査によるコミュニケーション行為の分類

屋外空間におけるコミュニケーション行為の種類を定性的に把握するために、平成17年10月～11月にかけて東大阪市の長瀬地区・八戸ノ里地区を踏査<sup>2)</sup>し、屋外で行われているコミュニケーション行為を収集した。調査の結果、屋外空間におけるコミュニケーション行為を、表1に示すように、①目的・情報共有型、②装置誘引型、③遭遇型、の3つに分類するこ



図1 誘引装置の類型

とができた。

①「目的・情報共有型」は、生協の共同購入時に人々が集まるように、いつでもどこ何のために集まるのかがあらかじめ決まっており、情報や目的が共有されていることによって起こるコミュニケーション行為である。②「装置誘引型」は、駄菓子屋に子どもが集まってくるように、何か誘引装置があってそこに集まってきた人たちがコミュニケーションを行なうものである。③「遭遇型」は、道を歩いていると偶然出会うことで始まるコミュニケーション行為である。これは、さらにⅠ) 待ち受けタイプとⅡ) 出会いタイプの2つに分類することができる。Ⅰ) 「待ち受けタイプ」とは、ベンチに誰かが座っていてそこを通りかかった人と出会うように、一方が待ち受けているパターンである。Ⅱ) 「出会いタイプ」は、歩いている人どうしがばったり出くわすように、両者が偶発的に出会うパターンである。

### 3. 装置誘引型コミュニケーションの分析

本研究では、以上の3タイプの中から「装置誘引型」に着目し、研究を進めることとする。装置誘引型に着目した理由は、このタイプは都市デザインによって誘発させる可能性が高いからである。「遭遇型」は名前のとおり偶発的な出会いであり、デザインとして操作することはむずかしい。また、「目的・情報共有型」は情報共有のためのしかけが最も求められるため、都市デザインの観点からのアプローチには向いていない。それに比べ、「装置誘引型」は、空間の中に誘引装置を用意するだけでどこでもコミュニケーション行為を発生させることができる可能性をもっている。

装置誘引型は、さきほども述べたように、何らかの誘引装置があって、そこに人々が集まってくることでコミュニケーション行為が生まれるものである。そこで、本研究では、人々を誘引する誘引装置にはどのようなものがあるか、そして、それが時代的にどのように変化しているのか、について調査・分析を行なう。調査対象として、江戸期・昭和30年代・現代の3つの時代を設定する。これは、社会状況の変化が空間やコミュニケーション行為にどのように影響を与えてきたのかに着目したものである。つまり、近代化による変化を見るために江戸期を選び、高度経済成長による変化を見るために昭和30年代を選んだ。

江戸期では、参考文献8)～10)に示した文献を用い、図会・浮世絵に描かれた装置誘引型コミュニケーション行為とそれを発生させている誘引装置を抽出する。また、昭和30年代の状況は、参考文献11)～20)に示した文献を用い、写真に写されている装置誘引型コミュニケーション行為とそれを発生させている誘引装置を抽出する。<sup>3)</sup>さらに、現代は、2章の分析にも用いた東大阪市の長瀬地区・八戸ノ里地区の踏査結果から、装置誘引型コミュニケーション行為とそれを発生させている装置を抽出する。

### 4. 誘引装置の分類

抽出・収集した誘引装置は、その移動度合いから整理すると、「常設型」「仮設型」「滞留型」「移動型」の4つに分類できる。(図1)

「常設型」は、名前のとおり移動せず常設された装置のことである。たとえば、駄菓子屋や花屋、八百屋などがある。こうした誘引装置は

私有物であり、基本的に私有地に置かれている。「仮設型」は、靴磨き屋や屋台、露店のよう、簡易な構築物でできているものである。設置・撤去を繰り返すが、その頻度は一日一回程度であり、一カ所に留まり動かないものである。これは、さきほどの常設型にくらべて公共空間に置かれることが多い。続いて「滞留型」は紙芝居屋や焼き芋屋などのように、移動しつつも一定の場所へ一定時間の滞留を繰り返すタイプのものである。そして、最後の「移動型」は、常に移動している装置のことである。これは、金魚売りや飴売りといった振り売りのように、呼び声を発しながら移動し、お客があれば留って商売をする。

### 5. 江戸期から昭和30年代にかけての誘引装置の変化

江戸期、昭和30年代、現代の3つの時代においてみられた誘引装置を、時代ごとに整理したものが表2である。ここでは、4章の分類に加えて、コミュニケーション行為の内容によって、商行為と芸能行為に分類している。

表2をみると、江戸期に多くみられた芸能行為が、昭和30年代には減少していることがわかる。これは、明治政府によってまちなかの芸能行為が禁止されたことが原因の一つとして考えられる。鳴海<sup>6)</sup>や土肥<sup>7)</sup>による既往論文の分析によれば、こうした変化について次のように説明される。

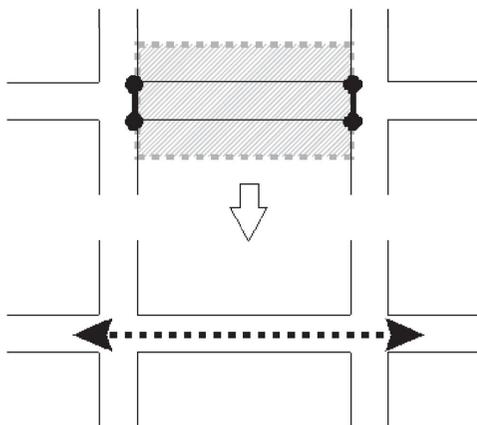


図2 町の広場から通行空間への道路機能の変化

土肥の研究で示されているように、江戸の街路は町ごとに管理されていたが、実際には大道芸人たちが利用の権利と引き替えに町から往還や広小路などの管理をまかされていることが多かった。つまり、大道芸人は路上で自由に芸を見せられる権利と引き換えに街路の管理を行っていたのである。

当時、大道芸は、乞胸という特殊な賤民身分が支配・管理していた。乞胸は、江戸の寺社境内、広小路、往還などのオープンスペースで行なわれていた芸能のうち、その支配関係が明らかでないものを取りまとめ、幕府の制度に組み込むようにつくられた身分集団である。彼らは、往還や広小路の管理を各町からまかされ、表通りの掃除や飲料水の運搬、路地の夜番などを請け負っていた。

しかし、明治になると政府は大道芸の取り締まりに乗り出す。大阪府では1872年（明治5年）に「先般非人之唱被廢候上ハ、辻芸・門芝居等賤敷遊業を以渡世いたすべからざる筈二付以来町村に於て嚴重停止可致事」という布令を出している。<sup>21)</sup> 1871年（明治4）に出された解放令によって非人という身分がなくなったのだから、辻芸や門芝居などをしてはならない、という趣旨である。また、1875年（明治8年）には、俳優諸芸能結社例規によって、芸能を行なうものは政府に認められた結社を立て税金を収めたものに限られることになった。

さらに、このような大道芸そのものの取り締まりだけでなく、土肥が分析しているようにオープンスペースとしての道路の変容も大道芸の衰退につながったと考えられる。

江戸期には、辻ごとに木戸が設けられ、夜間に木戸を閉めることによって町の安全を保ってきた。当時の町は「両側町」といわれるように街路を挟んで両側で町を構成していた。つまり、街路は、家屋と家屋に囲まれた町の共有空間、広場として機能していたといえる。しかし、明治期に入ると、1869年（明治2年）の自身番屋の免除によって、街路は官有地として一連の道路として取り扱われ、機能上は通行のための空間という意味合いが強くなっていく。

表 2 誘引装置の変遷

		江戸（浮世絵・図会）	昭和 30 年ごろ（写真集）	現代（目撃写真）		
商行為	常設	ようかん屋 ういろう屋 餅屋 お菓子屋 歯磨き粉屋 金魚屋 おみくじ屋	呉服屋 扇屋 菓屋 煎餅屋	八百屋 蕎麦屋 駄菓子屋 たこ焼き屋 お茶屋 おでん屋 本屋 靴磨き	八百屋 生活用品店 駄菓子屋 たこ焼き屋 花屋 雑貨屋 リサイクルショップ 宝くじ	
	仮設	薬売り 紙屋 石屋 酒売り 魚屋 飴売り すし売り	饅頭屋 種売り 牡蠣売り あめ宝引 お茶屋 細工物屋 歯磨き粉屋	豆売り ハギレ売り 蕎麦屋 砂絵屋 魚屋 新聞売り くじ売り くつ屋	靴磨き 実演販売 朝市 おでん屋 桶屋 うなぎの蒲焼 錆掛屋	お茶屋 服屋 たいやき屋 朝市 ホットドッグ屋 アクセサリー屋 おだんご屋 イラスト屋 オープンカフェ 似顔絵屋 花屋 八百屋
	滞留	団子屋 沈香屋 蛍売り 薬売り 宝引 鳥屋		紙芝居屋 キセル売り ラオ屋 飴売り 回転焼き屋 焼いも屋 おでん屋	ラーメン屋 農家の行商 ヤマガラののおみくじ	焼いも屋 ボン菓子屋 パン屋 メロンパン屋 焼き鳥屋 クレープ屋
	移動	花屋・植木屋 もぐさ売り 飾り松売り お菓子屋 団扇売り かんびょう売り いも売り 魚屋	包丁売り 履物屋 泥めんこ売り 薬売り 煮売り 弓売り 手車売り 食器売り	だいこん売り ラオ屋 食器売り 魚売り 焼いも屋 おでん屋 金魚売り 農家の行商	定斎屋 飴売り ブラシ売り 桶屋 ヤマガラののおみくじ 荒物屋 花屋	焼いも屋 豆腐屋 紙芝居屋
芸能・見世物	仮設	曲芸師 見世物屋 射的 旅芸人 手品師 小芝居屋	漫談師 講談師	大道芸人 砂絵を描くおじさん	ストリートミュージシャン 似顔絵屋 イラスト屋	
	滞留	人形使い 人形劇屋 紙芝居屋 猿回し 猿曳 住吉踊 大黒舞 ちんどん屋		紙芝居屋 大道芸人		
	移動	へび使い 鉄輪役 大道芸人				
その他	手水舎 地藏 物乞い		縁台将棋 ゴミ収集	池 地図・案内板 灰皿（喫煙コーナー） 本棚 手水舎 猫		

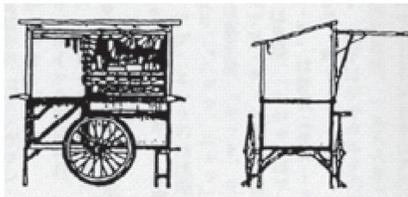


図3 インドネシアのロンボン (rumbong)



図4 自動車利用の屋台とストリートパフォーマンス

(図2) そこでは、大道芸などの道路占有は、通行機能の障害として排除すべきものと変化していくのである。

こうした社会的変化と空間的変化が相互に影響しあいながら、大道芸の意味合いが変質し、そのことが大道芸の減少へとつながったと考察できる。

## 6. 昭和30年代から現代にかけての誘引装置の変化

次に、昭和30年代と現代にかけての誘引装置の変化を表2から読み取ると、移動型の商行為の減少が顕著である。

昭和30年代には、羅宇屋、食器売り、魚売り、おでん屋、金魚売り、定齋屋、飴売り、ブラシ売り、桶屋、荒物屋、花屋、など、様々な移動型の商行為がみられた。しかし、年々、移動商は減少し、常設型の店舗にとってかわられていく。

これは、高度経済成長による消費行動の変化が影響していると考えられる。時代とともに、商店街での買い物、さらにはスーパーでの買い物が主流となっていった。さらに、近年は、ショッピングモールによって、商空間は屋内化され、天候に左右されず買い物を楽しむことができるようになってきた。たしかに、これは機能的、合理的、効率的である。しかし、その一方で商業者と消費者のコミュニケーションは減少していった。

また、昭和35年の道路交通法の制定によって、道路で露店、屋台店等の店を出そうとする場合には道路使用許可が必要になった。交通の安全と円滑化を優先するために、交通の妨害となるようなモノを路上に置くことが禁止された。つまり、自動車の増加によって自動車交通

優先の道路体系が構築され、それが路上の行為に制限を加える結果となっていったといえる。さきほど述べたように、明治以降、通行のための空間という役割をおもに担うようになった道路であるが、高度経済成長期の自動車の普及にともない、自動車交通のための自動車優先の空間へと、さらに役割が限定されていった。その結果、人間の行為が道路上から排除されていったといえる。

## 7. 近代化による屋外コミュニケーション空間の変化

このようにみえてくると、屋外におけるコミュニケーション行為の誘引装置とそれが置かれるオープンスペースは、近代化とともに変質していったと捉えることができる。事実、近代化が進行していない発展途上国では、屋外でコミュニケーション誘引装置がまだまだ多く見られる。たとえば、インドネシアの状況を著わした『カンボンの世界』<sup>22)</sup>の中で布野は次のように述べている。「カンボンには、ありとあらゆる物売りが訪れる。ロンボン rumbong (屋台) とピ克蘭 pikulan (天秤棒) の世界である。なつかしい。日本の下町にも、ひっきりなしに屋台が訪れていたのだ。」(図3)

近代化の進展、とくに資本主義によって公共性に変質が起こったと指摘した論者の一人にセネットがいるが、彼は『公共性の喪失』<sup>23)</sup>のなかで、18世紀半ばに公的な空間として整備された広場、公園、劇場では、人々は公共性を感じることができたと述べている。そこでは、自らが他者と積極的に関わることによって公共性が担保された。しかし、19世紀、20世紀と時代が下るにつれて、空間や時間は消費するものと化し、人々は公的なものに対して受け

身になっていく。そして、公共性の喪失をもたらすのである。

本研究で分析したコミュニケーション行為の誘引装置の変化も、こうした近代化の影響として捉えることができよう。まず、江戸期から昭和30年代にかけての変化でみられた路上における芸能行為の減少は、明治期以降の公的管理の進展によって、芸能行為そのものが排除されるべきものとなったことに加え、公有地となった道路が広場の意味合いから通行機能優先の連続空間へと変質してしまったことによる影響であると考えられる。また、昭和30年代から現代への変化にみられた路上の商行為の減少は、資本主義の進展による消費行動の変化が影響したものであると捉えられる。

さらに、こうした変化は、コミュニケーション行為の屋内化とも考えることができる。江戸期には大道芸として屋外の公共空間で行なわれていた芸能は、時代が下り劇場という室内空間で演じられるものになっていったし、移動商が常設店舗へ、そして、ショッピングモールへという変化も消費の場面でのコミュニケーション行為の屋内化と捉えられる。

ゲールは『屋外空間の生活とデザイン』<sup>24)</sup>のなかで「建物のなか、住宅地、都心、公園や緑地など、人びとがいるところではどこでも、ほぼ例外なく、人びとと彼らの活動が他の人びとを引きつけている。人が人を呼ぶ。人びとはいっしょに集まり、いっしょに動きまわり、他の人びとのそばに身を置こうとする。新しい活動は、すでに行なわれている出来事の近くで始まる。」と述べ、行為が行為を誘発する可能性について指摘している。こうした視点にたてば、公衆の目に触れやすい屋外の公共空間においてコミュニケーション行為が多いほど、他のコミュニケーション行為を誘発する可能性が高まるのだが、屋内化はそれを阻害する方向に向かうといえる。

## 8. 現代における誘引型コミュニケーション行為の姿

では、今後、都市デザインとして誘引装置を

増加させ、屋外におけるコミュニケーション行為を増加させるためにはどのようにすればいいのだろうか。

じつは、表2でわかるように、現代でもみられる誘引装置は少なくない。たとえば、それは、メロンパンやクレープ、焼き鳥の屋台などである。こうした商行為は、昭和30年代までの振り売りとは違って、自動車を利用した滞留型ないし移動型のものが多くなっている。また、芸能行為の範疇でも、ストリートパフォーマーの増加が見られる。(図4)このように、ポスト近代的な動きのなかで、少しずつコミュニケーションを誘発する空間や装置が生まれていると考えられる。都市デザインとしても、まちかどのポケットパーク整備などによって、こうした誘引装置をどのように発生させ、受け止めていくかが今後重要になってくると考えられる。

## 9. まとめ

以上の分析、考察をまとめると、本研究では以下のことを明らかにすることができた。

- 1) 屋外空間におけるコミュニケーション行為を、①目的・情報共有型、②装置誘引型、③遭遇型、の3つに分類することができた。
- 2) 装置誘引型コミュニケーション行為を発生させる誘引装置を、その移動度合いから、「常設型」「仮設型」「滞留型」「移動型」の4つに分類できた。
- 3) 江戸期から昭和30年代にかけての装置誘引型コミュニケーションの変化では、路上における芸能行為が減少していたが、それは明治期以降の公的管理の進展によって、芸能行為そのものが排除されるべきものとなったことに加え、公有地となった道路が広場の意味合いから通行機能優先の連続空間へと変質してしまったことによる影響であると考えた。
- 4) 昭和30年代から現代への装置誘引型コミュニケーションの変化では、路上の商行為の減少がみられたが、これは消費行動の変化や自動車普及による道路空間の変質が影響したものであると考えられる。

5) 近年、商行為では自動車を利用した移動屋台の増加、芸能行為ではストリートパフォーマーの増加が見られるが、こうしたポスト近代的な行為にどのように対応していくことができるかが都市デザインとして重要な課題であると考えられる。

## 注

- (1) 本論文は、2007年度近畿大学大学院修士論文「コミュニケーション行為を誘発する空間の特性に関する研究」(吉本恭子)を基礎として、再考察を行いとりまとめたものである。
- (2) 長瀬地区・八戸ノ里地区は、それぞれ近鉄大阪線長瀬駅、近鉄奈良線八戸ノ里駅に近く、住商工混在のいわゆる下町地区である。経験上、下町は屋外空間におけるコミュニケーション行為の発生が比較的多いと判断し、調査対象に選んだものである。また、調査では昼間に地区内を巡回し、目撃したコミュニケーション行為を写真撮影した。
- (3) ここで抽出したコミュニケーション行為は、実際に実際にあった行為を網羅的に抽出したものでなく、画家や写真家によって選択的に描かれた／写されたものであることに留意しながら分析を行なった。そのため、本研究では、コミュニケーション行為の数量を把握するのではなく、行為のバリエーションの多少を定性的に分析した。

## 参考文献

- 1) 北原啓司・桂久男・近江隆(1989)「住戸まわりにおけるSP化と「境界」形態」都市計画論文集, 24号, pp.415～420
- 2) 齊藤広子(2001)「計画的戸建て住宅地における道路形態が近隣コミュニティ形成に与える影響」都市計画論文集, 36号, pp.475～480
- 3) 全現美・鳴海邦碩(1999)「韓国都市における共同住宅団地の屋外空間整備手法に関する研究」都市計画論文集, 34号, pp.637～642
- 4) 涌田知昭・木多道宏・舟橋國男他(2002)

「長屋住宅地区における戸外生活行動の季節による比較と空間条件の分析」都市住宅学, No.39, pp.25～30, 都市住宅学会

- 5) 青柳端恵・堀繁(1996)「東京におけるオープンカフェの立地とデザインに関する研究」都市計画論文集, 31号, pp.223～228
- 6) 鳴海邦碩(1978)『都市における自由空間の研究』京都大学博士学位論文
- 7) 土肥真人(1994)『江戸から東京への都市オープンスペースの変容』京都大学博士学位論文
- 8) 朝倉治彦編(1988)『日本名所風俗図会 別巻 風俗の巻』角川書店
- 9) 赤井達郎編(1982)『浮世絵と町人』講談社
- 10) くもん子ども研究所(2000)『浮世絵に見る江戸の子どもたち』小学館
- 11) 青木正美, 西坂和行(2006)『東京下町100年のアーカイブス -明治・大正・昭和の写真の記録-』生活情報センター
- 12) 春日昌昭, 佐藤嘉尚(2006)『40年前の東京 -昭和38年から昭和40年- 春日昌昭の東京』生活情報センター
- 13) 持田晃(2005)『東京いつか見た街角』河出書房新社
- 14) 岩永辰尾(2005)『写真集 東京タワーが建ったころ -50年前の私たち』第三書館
- 15) 須藤功(2005)『写真ものがたり 昭和の暮らし 4 都市と町』農山漁村文化協会
- 16) 須藤功(2005)『写真ものがたり 昭和の暮らし 6 子どもたち』農山漁村文化協会
- 17) 杉田米行(2007)『GHQカメラマンが撮った 戦後ニッポン カラーで蘇る敗戦から復興への記録』アーカイブス出版株式会社
- 18) 伊藤正直, 新田太郎(2005)『ビジュアル NIPPON 昭和の時代』小学館
- 19) 岡本良一(1985)『写真集 明治大正昭和 大阪:ふるさとの思い出. 上』国書刊行会
- 20) 島田清(1986)『写真集 明治大正昭和 大阪:ふるさとの思い出. 下』国書刊行会
- 21) 中島智枝子(2000)「大阪における明治初期の非人施策について」『大阪の部落史通信』24号

- 22) 布野修二 (1991) 『カンボンの世界』  
PARCO 出版局
- 23) Richard Sennett (1976) “The Fall of  
Public Man”, Knopf, 邦訳『公共性の喪失』  
晶文社
- 24) Litt. Jan Gehl (1987) “Public Spaces &  
Public Life”, InBy, 邦訳『屋外空間の生活  
とデザイン』鹿島出版会